

小さい商店における手代・小僧の如き又小規模の工場の労働者の如き未だ此の風が残つてゐるが所謂近世資本主義の成立と共に出来た大工業組織の工場に働く労働者に至つては全く此主従關係が姿を消してしまつた。彼等が雇主に對する關係は僅かに雇用上の法律關係たる過ぎない。兩者を繋ぐものは只だ「勞銀の支拂」一いふ事あるのみである。だから所謂無產者階級の人々は雇主からして何等精神的の慰めや助けを受けず一人立の覺悟が無ければならぬは勿論であるのみならず物質上においても何時もになつて翌日から路頭に迷ふやうになるかも知れぬといふ事を豫め覺悟てるなければならぬ。我輩等とても人である。何時死ぬかも知れないが死んだからさて雇主はその跡を見てはくれない。而しその日の暮しが漸くの事である。

我輩等に何で失職後や死後の用意がして置かれやう。我輩等は實に不安な生命的の網濾りをしてゐるのである。  
又茲に新婚の夫婦があつて互に手を取り合ふて悦んで言ふには『貴郎は毎日工場へ出て日に一圓の質銀を貰て歸るし、妾は又内職で自分の食持だけは稼ぎます。どうです、二人の收入の一部を割いて貯金をしやうじやありませんか』と然るに悲しむべし、間もなく新郎は患て病床に陥る事となつた。遂に二人が收入の一部を割いて貯めた金は二三日ならずして無くなつて了つた。殘る處は米屋や薪屋の借金のみである。そして米屋や薪屋は殘金を辯済せざる限り金輪際一合の米、一束の薪をも持つて來やうとは言はないのだ。又茲に一人の熟練職工があつたとする既に二三十年も工場に働いて寄